様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　31　日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究　(C)一般
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９８４

研究課題名（和文）　総合学習・各教科・特別活動の連携に焦点をあてた食育実践モデルの構築

研究課題名（英文）　Proposal of a model curriculum for food education focusing on the combination of all subjects, the period for integrated studies and special activities.

研究代表者
増澤 康男（MASUZAWA YASUO）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：30119622

研究成果の概要（和文）：

１．兵庫県小学校研究指定校の食育実践を分析した結果、健康・栄養に関する課題が最も多く、以下、食事の楽しさや人との関わり、調理、生産、と続いた。
２．兵庫県下の食育研究指定校を中心に学習指導案と年間指導計画を収集してデータベース化し、キーワード検索できるようなシステムを構築した。
３．予め設定した食育のねらいの枠組みに沿い、教科・総合学習等を組み合わせた食育モデルカリキュラムを作成し、実践・評価した。目標に沿った評価規準に従って活動を評価した結果、モデルの妥当性が確かめられた。

研究成果の概要（英文）：

1. The curriculums for food education ('Shokuiku') were analyzed to clarify what was mainly learned at elementary schools specified for 'Shokuiku' research school in Hyogo Prefecture. 'Health and nutrition' was the mostly-studied category, and 'importance of enjoying to eat', 'building a good relation through having a meal together', 'cooking' and 'production of food' were also learned favorably.
2. Instruction plans of one hour class or through a year were collected mainly from research schools in Hyogo Prefecture, and brought together in the database where retrieval by keyword was possible.
3. Framework of the aims of food education, was provides and a tentative model curriculum was presented in the combination of all subjects, the period for integrated studies and special activities. An instruction plan was made from the model curriculum, and the validity of the model curriculum was confirmed by evaluating the activities in M elementary school according to the standards determined in agreement with the aims.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009　年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010　年度	900,000	270,000	1,170,000
2011　年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教科教育学・教科外教育学（総合学習・道徳・特別活動）
キーワード：食育、実践モデル、カリキュラム、評価

１．研究開始当初の背景

(1) 学校での食育推進の制度的な裏付けの整備：

食育基本法（ 2005 ） の制定を受け、中教審教育課程部会審議経過報告（ 文科省 2006)･同審議のまとめ(文科省 2007) において、食育は体験活動の基盤であり、教科等を横断して取り組むべき課題とされた。

また、栄養教諭の任用が本格的に開始され、「食に関する指導の手引き（ 文科省 2007)」において、食育基本法を踏まえた新しい観点で「食に関する指導」を行うことを学校での食育と規定した。この考え方は、2008 年改訂学習指導要領に踏襲され、総合的な学習の時間（ 以下総合学習と略） ・家庭科（ 技術・家庭科） ・体育（ 保健体育） ・特別活動（ 学級活動等) の各学習指導要領解説（ 2008 文科省) には、各教科等における食育の位置づけが記載された。

(2)食育の学習内容と実践方法：

新学習指導要領では、各教科等での食育の位置づけは明記されたが、小学校～中学校を通して食育として何を学んだらよいか、総合学習・各教科・特別活動を横断した学習のあり方は示されなかった。

一方、食育の学習項目は、各教科の食に関連した学習内容と重なる。食べ方や栄養・調理は家庭科（ 技術・家庭科） で、食と健康は体育（ 保健体育） で、また農業生産・食文化は社会科で、体のつくりや生命の連続性に関しては理科で学ぶ。給食指導は特別活動として実施される。

従って、各教科等で学習する食に関連した内容を食育の基本的な学習項目として示し、児童生徒がこれらを関連づけて考え、食生活を見直すことができるようにすることで、食育の第一の目的「食に関する知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる（ 「食育基本法」） 」は達成できる。そのためには、総合学習・各教科・特別活動をスムーズに連携させた学習が必須となる。

(3) 学校における食育推進の課題：

食育の必要性は広く認識されるようになったが、研究指定校等を除いた学習の実態は明らかでなく、従来と同じ給食指導を食育としている学校も多い。学校教育全体の中で実効性をもたせるためには、まず一定の規模を持つ食育実態調査と学習効果の検証が必要である。

また、食育の基礎・基本となる学習項目の提示に加え、どの学校の教育課程にも無理なく効果的に食育を組み込むことを可能とする実践モデルを示すことが望まれている。食育以外にも教科の枠組みを超えた学校における学習課題は数多いが、食育のためにその他の課題の学習をおろそかにはできないからである。教科における学習内容を基本とした食育実践は、無理なく効果的な食育実践の基本的な枠組みと考えられる。

以上より、本研究では、初めに学校における食育の現状調査を行う。その上で、食に関わる教科内容を基礎･基本と位置づけ、総合学習（ 小学校１ ・２ 年生は生活科） ・各教科・特別活動の連携による食育実践に焦点を当てて優れた実践を分析し、構造を明らかにすることで、有効な実践モデルを提示できる可能性が高い。

２．研究の目的

(1) 学校での食育の現状を知り、食育の目的の枠組みを提示する。

(2) 食育データベースを構築する。

(3) どの学校においても食育を無理なく実践可能とするカリキュラムモデルを提示する。

３．研究の方法

以下、各研究目的毎に研究方法の概略を記す。

(1) 食育についての現状調査と目的の枠組みの提示：

食育の実態を知り、効果的な食育実践のあり方を明らかにするために、研究指定校の学校研究紀要を集め、その内容をキーワード別に分類し、どのような実践が多く行われているかをまとめる。また、研究指定校にアンケートを送付し、食育の成果と問題点を整理する。

以上のデータと食育基本法の目的から、学校における食育の目標を抽出・整理し、その枠組みを提示する。

(2) 食育の実態調査・データベース構築と効果的な食育実践のあり方の明示：

食育研究指定校を中心に食育の年間指導計画、指導案等を集め、データベースを構築する。データベースはキーワード検索ができる形とし、web 上に公開する。

(3) 食育実践モデルの提示：

食育の基礎・基本となる学習項目と実態調査から得られた効果的な食育実践のあり方を元に、総合学習・各教科・特別活動の連携に焦点を当てて、実践モデルを提示する。モデルの有効性を検証するために、カリキュラムモデルに基づき、実践校の実態と合わせた指導計画を作成し、授業実践を行い、目標に沿った規準をもとに評価する。

４．研究成果

(1) 兵庫県の研究指定校を中心に学校研究紀要を集め、記載された食育単元の内容を示すキーワード別に分類し、どのような実践が多く行われているかを調べた。キーワードとしては、実施学年、時間数、実施時間枠（総合、教科名、特別活動等）、ティームティーチング・ゲストティーチャーの有無、単元目標、内容を示す大項目（健康、栄養、調理、生産・農業、栽培、流通・消費、食文化　等）、大項目の具体的な内容を示す小項目、使用した主な教材の種類、等、とした。最も多く実践されている内容は、健康・栄養に関する課題であり、以下、食事の楽しさや人との関わり、調理、生産、と続いた。

平成 17 年・18 年と平成 20 年・21 年の実践を比較したところ、実践されている内容や方法はほとんど変化なく，兵庫県の研究指定校における食育実践のあり方は，一定の形で定着してきていることがわかった。また，研究指定校へのアンケートを実施し，学校における食育の成果・実践に際しての問題点等を整理した。

(2) 兵庫県下の食育研究指定校を中心に学習指導案を約 300 収集し、約 50 に精選した後に、データベース化し、1. で整理したキーワードで検索できるようなシステムを構築した。また、年間指導計画もデータベース化した。これを兵庫県教育委員会の食育に関するホームページ上にアップし、試験運用を開始し、24 年度には本格運用できる見通しがついた。

(3) 上記の結果と食育基本法に記載された食育のねらいに基づき小学校における食育実践のための３つの大項目のもとに「７つの柱」を以下のように設定した。

食育の目標の枠組み							
大項目	体験		食べ物			食べ方	
目標例	栽培・調理の難しさや楽しさを体験し，協力して活動できる		自然の恵みを実感し，生産する人の工夫や努力に感謝して，食文化を尊重した食生活を送ることができる			食事バランスについて理解し，皆と楽しく，リズムに気をつけて食べることができる	
小項目（７つの柱）	栽培活動	調理・配膳・手伝い	自然の恵み	生産・流通・消費・廃棄	食文化	食の楽しみ・リズム，共食	健康・栄養

７つの柱に従って、小学校一学年から六学年までの食育のねらいを整理し，各教科，総合学習，学級活動を組み合わせた年間指導計画の形で，食育実践モデルの試案を作成した。更に、長崎県 M 小学校において、学校の実態（児童の実態と従来の取り組み）と摺り合わせた上で食育カリキュラムを作成し、実践・評価した。実践したカリキュラムの特徴・ねらいは次の３点とした。

① 各学年各教科の食に関連する単元を７つの柱に沿って抽出・整理して組み込むことで，学年段階に応じて児童が無理なく食について学ぶことができる。

② ７つの柱と関連させた各単元目標を設定することで，明確な目標に沿った評価が可能になる。

③ ①で抽出した単元を栽培や調理等の体験的な活動と関連付けて学ぶことで、食に関する様々な知識をつなぎ、物事を考えることができる力を育むことができる。また、全学年共通のカリキュラムとして「栽培」「食べ方」を設定することで食に関して基本となる知識・感性を体験的に身につけることができる。

児童のふり返りシート（単元末・学期末）

と教員によるふり返りから評価規準に従ってカリキュラムを評価した結果、設定した目標は概ね達成できていたことから、モデルの妥当性が確かめられた。しかし、一部の目標が不明瞭、単元構成のバランスや学級活動の内容が不十分、更に知識をつないで考える力がついたかどうかは不明確、等の課題が示され、これをもとに改善プランを作成した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
増澤　康男（MASUZAWA YASUO）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：30119622

(2)研究分担者
岸田　恵津（KISHIDA ETSU）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：70214773
永田 智子　（NAGATA TOMOKO）
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：10283920
湯川 夏子　（YUKAWA NATSUKO）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40259510
久保 加織　（KUBO KAORI）
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号：10190836